

©2020年5月

◎第1940回 定期公演 Cプログラム

■プーランク

■グロリア (約24分)

20世紀フランスの作曲家プーランクは、2つの世界大戦の影響もあり、音楽院で正規の音楽教育を受ける機会を逸した。それは彼にとって強みともなり、型にはまらない斬新(ざんしん)なアイデアで、ジャンルの枠を超えた創作を次々と世に問うていく。オペラ《カルメル派修道女の対話》や《人間の声》を成功させ、確固とした地位を築いていたプーランクが、晩年近くになって《グロリア》を作曲したのは、クーセヴィツキー財団からの委嘱に対する構想が固まったからである。ボストン交響楽団の常任指揮者であったセルゲイ・クーセヴィツキー(1874~1951)が妻の死をきっかけに1942年に設立したクーセヴィツキー財団は、気鋭作曲家への新作委嘱で、数々の名作を生み出していた。バルトークの《管弦楽のための協奏曲》やメシヤンの《トゥランガリラ交響曲》もそのひとつである。プーランクへの委嘱も当初は「交響曲」であったが、プーランクはこれを断り、《グロリア》を作曲するという合意を得た。作曲家自身、合唱付きの大交響曲であると述べているが、《スターバト・マーテル》などの宗教曲はもちろん、歌曲やオペラなど、彼の得意な声乐ジャンルで培った経験がすべて投影されている。

テキストは通常のラテン語によるミサ通常文「グロリア」に基づき、そこから6つの章を構成している。陽と陰の楽章が巧みに配置され、心を揺り動かされる。〈神に栄光あれ〉はト長調の開放的な明るさで幕を開ける。〈たたえまつる主を〉では、ハ長調でさらに楽天的な陽気さを増し、次に続く〈主なる神よ〉と好対照をなしている。ここではソプラノ独唱が、劇的ながらもしっとりとした歌唱をロ短調で聴かせる。〈神のひとり子である主よ〉は〈たたえまつる主を〉と同様の雰囲気をもつト長調の短い楽章。〈主なる神、神の子羊〉では再びソプラノ独唱が音楽を率いる。その旋律に含まれる増4度と増5度の音程が、管弦楽の不協和音に呼応する。プーランクらしい響きが聴かれる白眉の楽章である。〈おん父の右にすわりたもう主よ〉はメゾ・ソプラノとテノールのアカペラ合唱で幕をあける。冒頭のグロリアのファンファーレが回帰する。ソプラノ独唱による「アーメン」の呼びかけから始まる終結部の終わりに、ふたたびグロリアの主題が現われ、アーメンが静かにエコ

ーして余韻の中に終わる。

作曲年代：1959年5月～1960年6月

初演：1961年1月20日（21日とする説もあり）、ボストン、シャルル・ミュンシュ指揮のボストン交響楽団、アデーレ・アディソンのソプラノ独唱、プロ・ムジカ合唱団

（安川智子）